

(史料紹介) 翻刻 鳳来寺蔵『武田実記』

——『甲陽軍鑑』の絵画化資料——

沢 井 耐 三

解 題

ここに紹介する『武田実記』は愛知県新城市の鳳来寺が所蔵する絵巻一巻で、現在は長篠城趾史跡保存館に寄託され、展示品として一般に公開されている。

天地22.5センチ、全長は10メートル前後。表紙は、緑地に白い菊花の模様を織り出した緞子装。表紙にも巻頭にも書名はなく、鳳来寺に奉納された際、絵巻を納めた箱に「古銅不動明王之尊像／天海僧正之筆、武田実記之巻物壹巻」とあるのにより『武田実記』と称されている。絵巻は不動明王の像とともにこの箱に納められていた。

さらに、この箱の内側には「正保三年丙戌八月十日田中多門之介昌吉（花押）」とあり、このころ鳳来寺に奉納されたと考えられる。正保三年は1646年。

絵巻の内容は、武田晴信（信玄）の初陣から勝頼が天目山で自刃するまでの間の、武田家のあまたの合戦の中から、武田方武将の戦場における勇敢で感動的な十場面を選び出し、絵を添えて顕彰しようとしたものである。

画面は彩色十一図。最初に「武田二十四将」の図と「諏訪法性上下大明神」「疾如風、徐如林、侵掠如火、不動如山」などの旗幟を描き、以下

2 天文七年 甲州韮崎合戦

(小幡山城守)

3 天文十五年 信州戸石合戦

(横田彦十郎)

4 天文十六年 信州上田原合戦

(武田晴信)

5 天文二十三年 富士大宮合戦

(小幡又兵衛、原美濃守)

6 永禄二年 信州小田井の城攻め

(広瀬郷左衛門)

7 元亀三年 遠州三方原合戦

(土屋右衛門尉)

8 天正三年 三州長篠合戦

(馬場美濃守、笠井肥後守)

9 天正十年 武田氏滅亡①

(武田勝頼、土屋惣蔵)

10 同 武田氏滅亡②

(小宮山内膳)

11 同 武田氏滅亡③

(勝頼御室、女房衆)

の場面を取り上げている。

最初の二十四将図は図中に人名が注記されるのみであるが、続く十画面は、いずれも合戦における武將のエピソードが記され、特に武將による殺傷の場面が主で、中にはかなり残酷な表現もある。その残酷さは絵において、より生々しく、切り取られた生首、身体から噴き出す血しぶき等、凄惨な戦闘の様子がリアルに写されている。輪郭をなす黒の描線は明確で細密、人物が入り組んだ戦闘画面も巧

みに描かれ、赤、黄、白、青などの彩りも鮮やかである。

記事の中には『甲陽軍鑑』の名前が見え、比較してみると同文関係と目されるところが見受けられ、本書が『甲陽軍鑑』を参照しつつ記事を成したことは確かであると思われる。(本稿においては、記事のあとに＊を付して、『甲陽軍鑑』(人物往来社版)の当該箇所、巻数、ページ数を付記した。)

本書については既に昭和56年1月、丸山彭氏によって『歴史読本』(臨時増刊81-3)「誌上初公開 武田実記 愛知県鳳来寺蔵」に紹介されたことがある。白黒写真による絵画部分が掲載され、丸山氏による短い画面説明が加えられている。

絵巻の後半には、掲出の合戦譚に続いて、武田氏滅亡後、徳川氏に従った武田旧臣の起請文、連署が記されている。前文として、

今度、東照宮幕下に属する甲信両国の諸士等、自今忠信を尽すべき旨、遠州於秋葉寺、各連署起請文を書しめ給ふ、成瀬吉右衛門、日下部兵右衛門奉之。

と記され、続いて、

武田親族衆、二十人衆、近習之衆、小十人頭、山縣衆、原隼人正衆、青沼助兵衛同心之士、一条衆、御嶽衆、小山田衆、遠山衆、栗原衆、典厩衆、城織部正同心之士、今福筑前守同心之士、葛根下野守同心之士、今福新右衛門同心之士、土屋

衆(以下省略)

に部類された諸士の名前が列挙されている。総名749名。そして最後に、

東照宮、甲信両国の令を下し給ひて、甲府を出給ひて浜松に御凱旋、于時、成瀬吉右衛門尉、日下部兵右衛門尉をして、甲州の奉行職になさしめ給ひ、平岩七之助を以、甲州之郡代に定めらるゝ。甲州先方の士、桜井、市川、伊清斎、工藤无随斎、岩間大蔵左衛門を以、国中の巷説を聞て、注進すべき旨、命せられ、成瀬、日下部、平岩等に加へしめ給ふ。甲信両国少々、東照宮の麾下に属せざる所有るに依て是を従がわしむべき命を奉て、大久保七郎右衛門尉忠世、柴田七九郎、菅沼大膳正、甲州に留る。

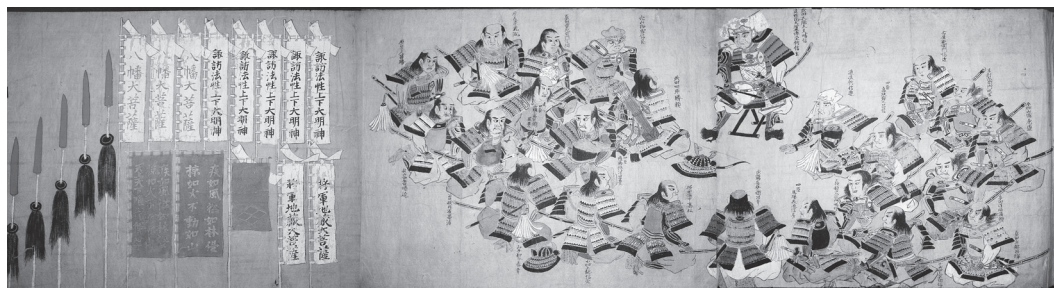
元和三日未年十一月十一日、高坂昌信所持不動銅尊像添而、鶴千代君奉進之。

(花押)

という一文を以て一卷を閉じている。

武田家滅亡後、徳川幕下に属した武田旧臣の起請、連署は一般に「天正壬午起請文」あるいは「甲信諸士起請文」などの名称で幾種か伝わっているが、本書もその一種とみなすことが出来るが、伝本ごとに人名の出入りは大きく、成立に関してはなお考究の必要が残されている。(本稿ではこの連署は割愛した。)

前半の合戦譚と後半の連署状とは、筆跡も用紙も異なっており、奉納の際に綴じ合わせ



場面1

たものであろう。連署状奥書の「元和三年」は本書の成立を意味するものではなく、恐らく箱書にいう「正保三年」の奉納に当たって、新調した合戦譚の部分に、元和三年奥書の連署状(写し)を貼り合わせたものであろう。合戦譚部分の絵も正保ころの絵柄と見るのが適当だろう。

翻 刻

(場面1 武田二十四将)

小畑山城虎盛	真田兵部昌輝
甘利左衛門晴吉	多田淡路満頼
土屋右衛門信近	小山田左兵衛信口
四臣 高坂弾正昌信	三枝勘由左衛門晴行
逍遙軒信連	四臣 馬場美濃信房

武田大膳太夫晴信

法性院大僧正徳栄軒信玄

	武藤喜兵衛昌幸
武田四郎勝頼	横田備中高松
穴山梅雪信良	四臣 内藤修理昌豊
真田源太左衛門信綱	小畑上総信定
原美濃虎胤	四臣 山縣三郎兵衛昌景
原隼人昌勝	山本勘助春幸
秋山伯耆晴近	曾根内匠昌清

(場面2 天文七年六月甲州葦崎合戦)

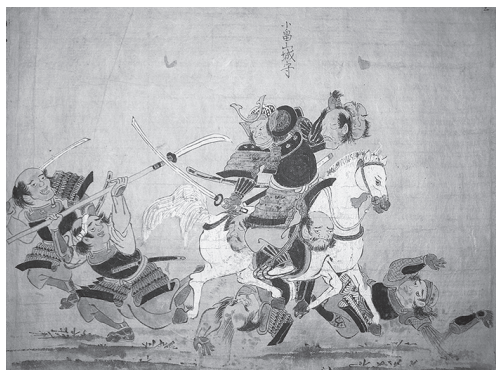
小幡山城守、天文七戌年六月十九日、甲州葦崎におゐて、諏訪頼茂、小笠原長時兩簑にて、武田晴信十八歳之時、兩簑、合九千六百也。武田方六千七百機也。辰刻より未の半迄四度勝負也。武田方勝利、信州衆と此時初而合戦也。此合戦に小幡山城守、大剛之働之様子は、三度合戦三度なから一番鎧を入始、高名をして、四度目には馬を敵之中江乗入、敵の足輕大将と馬上より組て落、高名仕。

其身七ヶ所手負、馬にも六ヶ所、手負せ、高名の印を、四の四緒手に附、晴信之前江参候故、諸手勝れたるとの感状を給り、其身手負たる血、馬の疵の血、印四ツの血にて、鵠毛の馬、栗毛のことくに見へたる故、其時分、上下共に若き者、されことに鵠毛の馬、栗毛に成ほと、武偏をせよと取さたり。山城守は小幡日浄か子なり。永禄四酉年六月死。
(*品第十八。上384~387頁)

(場面3 天文十五年三月信州小県郡戸石合戦)

山本勘助、横田彦十郎、天文十五丙午年三月九日、信州小県郡戸石合戦。敵は村上義清、人数六千余。武田晴信四千百七拾。此合戦、晴信一代になき後レを取給ふ程の儀なり。

巳午未三時之合戦、山本勘助、武略を以勝利也。甲州方上下共、勘助を直摩利子天之様



場面2



場面3

に申也。委は甲陽軍鑑に有之。

横田彦十郎、楽岩寺か下にて、物頭武士、馬上にて采牌を取て真先に進み寄、武者を蹴立懸る。敵と馬を乗寄、組て落、高名仕る。鎧疵、刀疵四ヶ所負、引退く。彦十郎二十二歳。此手柄のこつく成、勝たる武偏を十六歳より五度仕るなり。

(＊品第二十五。中巻14～15頁)

(場面4 天文十六年八月信州上田原合戦)

晴信、天文十六丁未年八月十一日に、しかの城、責落し、小室江馬を被入。逗留の所に、更級^{サラシナ}の村上、志賀落城を聞、我等与力の城、破却せられ、其上、去年真田に武略せられ、能武士数多殺され、旁以口惜次第なれば、今度晴信出陳を、幸にして是非簞本を目かけて、自身の勝負に仕り、扱々真田か首を予が刀の先に掛ル歟、二つに一つと思ひ切、敵の多勢に不構、七千余にて信州上田原へ被出、



場面4

八月廿四日辰刻、甲州方より合戦を初ル。

義清は手寄の者、四方へ突散されたるにも不構、晴信と互に馬上にて渡合、切先より火煙を出し伐戦。されとも馬、太刀の光りにて寄やうにても遠立。村上は敗軍。

武田方は勝軍。次第に武田勢かさみて見ゆる時、敵の大將と覚しき人、落馬したるを見て、村上衆十四五騎、雑兵四五十、早々引靡、彼人を取包み、丸く成て行。跡を取切られ加屋野へ懸り、深山へ入て漸、越後へ逃る。

武田勝利也。委は甲陽軍鑑に有。此時晴信二十七歳なり。

(＊品第二十七。中巻46～49頁)

(場面5 天文二十三年三月富士大宮の合戦)

原美濃守虎種、小幡又兵衛、天文二十三甲寅年二月、今川義元、北條氏康取合発り、今川より武田被頼。

信玄富士大宮江馬を被出、北條氏康と度々のせり合なり。三月三日辰の刻、かちまと云所におゐて、足輕迫合。初、小幡又兵衛二十一歳なれ共、十六歳より走廻り仕馴、敵の色心を知て、六人扣たる場にて突殺す。北條衆敗軍也。

河中にて相州衆の能武士二騎、さひはい取て、味方いさめ、各返して一勝負と申武者と、小幡山城守、川中にて組て落、其武者を討。采幣添て高名なり。

息又兵衛、重而乗来て、今一騎の武士、引



場面5



場面6-1. 右

取所を川の渡り上りにて、馬上より組て落、討取。是も采幣を添。父子共高名仕。

又兵衛、鎧付たる時の敵三人をも、藤右衛門、孫四郎と云中間、かせもの、首を討取。

右の迫合に相州方より原美濃守、例の細き金の半月、一方江半中宛出したる立物の甲を着て乗出し、物見の時、小幡山城守に詞をかはし、馬場備へはかゝらす、小山田弥三郎備江乗かけ候へ共、小山田も甲の前立物にて見知り、美濃殿、敵に逢ふて馬の乗様を能見よと云て一切不取合。

然所に近藤と云牢人、名乗て原近所へ刀を抜持て乗寄。美濃刀を抜はなし、むね打に近藤か甲へ懸りたゞき、馬より擲落、美濃に乗続たる相模武者首をとらんとする。

美濃、甲州にて我等方江出入たる者也、ゆるして呉られよと云て引取るゝを、北條、武田、今川家も不営はなし。此美濃守、元来甲州者なれ共、浄土法花宗論にて国法を背き、信玄より勘気にて、暫相州に居。此合戦無事に成、其後、右之原を所望にて甲府へ帰参す。永禄七子年に死。

(※品第三十一。中巻120～122頁)

(場面6 永禄二年二月信州尾台の城攻め)

広瀬郷左衛門、曲渕庄左衛門、諏訪越中守、小幡孫次郎、永禄二日未年二月、信州(おたり)おりの城におゐて、敵は村上方士大将、攻め給ふ時、板垣駿河守信形、先番に当り、迫合場にて広瀬郷左衛門、猪子才蔵、鎧を合、其上敵を討。曲渕庄左衛門と三科伝右衛門、



場面6-2. 左

鎧下の高名、敵仕負て城へつほむ。

信玄見切り、明日、板垣か簀本の若者共差添、内藤修理亮、原隼人正、逍遥軒を大将にして、五千を以此城を攻と定る。郷左衛門は我等能馬を不持、明日之城責、高名にはかまふまし、今朝城主か乗て出たりし、金の馬鎧掛たる馬をとらんと云。曲渕も一所にて、我等は城主の首をとらんと、諸傍輩之間所にて、板垣に断ことく、広瀬翌日城へ押込、馬を取は、庄左衛門は城主の首をとる。簀本にて諏訪越中か長柄を二本取て、敵を十五六人擲たをし、其後能侍を一人、ねぢ首して、白糸のこつく筋の見へたるを持来る。

小幡孫次郎は城主の弟次郎左衛門、二の郭の主を討。其内、家老の首と合て二ツ取、采幣を添、持来る。五千の中、簀本に二人、先衆に二人、合四人勝たる働なり。

(※品第四十七。下巻228頁)

(場面7 元亀三年十二月三方原の戦い)

土屋右衛門尉、元亀三子申年十二月廿二日、



場面 7

信玄出馬之時、敵と太刀打をして甲を切割らるれと、明珍の星冑成故、冑を損じて、身に中らず。終に組討にして首を取。其場大方ならぬ、せわしき所にて、内の者も敵味方入乱、すぐる事ならさるに付て、右衛門尉働、一入高名なり。

右衛門尉父、元来は金丸筑前守と云。武田家の中老也。右之右衛門尉、此時三拾一歳、長篠にて討死す。

(場面 8 天正十年長篠合戦。馬場信房と笠井肥後守)

長篠合戦、城主奥平九八郎、天正三乙亥年五月廿一日、武田勝頼壹万五千の人数を以、攻給ふ。敵は織田信長拾万之人数にて合戦。武田の家老馬場美濃守、内藤修理亮、山縣三

郎兵衛、小山田右衛門尉、原隼人、右御一戦無之やうに種々申せとも、長坂釣閑、跡部大炊、合戦可然と申故、尤とて、家老の謀を用不給、合戦初る。委しくは爰に除く。馬場、内藤、山縣、土屋右衛門尉討死。此外討死大勢なり。

右衛門尉は、先月信玄御吊に追腹切へきに、高坂異見、かやうの合戦を待と被申に付、命なからへ候、只今討死なりと断て、敵出ざるゆへ、自身懸つて、柵を破て其歳三十一にて討死也。

馬場は末手もおわず、同心被官をは皆退候へと申せとも、さすがの兵者共成ゆへ、美濃を捨て退す。一条右衛門太夫、馬場美濃方へ馬を乗寄、一所に居給ふ処、一条右衛門太夫同心和田と申もの、馬場に向て御下知あれと申。美濃是を聞、につこと笑て、下知には引退斗のことに候と云て、簀本の崩れさる間は退す。簀本衆、皆跡に残り、三百余騎討死して、勝頼をのけ奉り、大の字の抛簀、敵に押付を見せての後、馬場も退く。其後一条右衛門太夫も何も退るゝ。

美濃は退けば退かるれとも、長篠橋場少し跡へ返し、高き所江上り、我は馬場美濃守と云もの也、討て覚へにせよと、いかにも尋常に断、敵四五人鎧を以、突落す。刀に手をかけず。六十二歳にて生害す。

勝頼へ此合戦止り給へとの異見を承引なき



場面 8

ゆへ、そこにて釣閑、大炊に向て、合戦を進め申ものは、自然のがれらるゝとも、止メ申某^(それがし)は大形討死成、と申たる言葉ゆへなり。

扨又、勝頼へ始終付たるは、初鹿野伝右衛門三十二歳、土屋惣蔵二十歳、兩人也。勝頼の馬、草臥、不動。然所、笠井肥後守いづくよりか見て、乗来る馬より飛下り、召候へと申せは、左候はゝ、其方討死あるへきと被申ル。命は義に依て輕し、命は恩の為に奉る。^(せがし)倅御取立被下候へと申て、此馬に勝頼を乗せ奉り、其身は勝頼の馬の手綱を取ていたゝき、跡へ壺丁程戻り、討死する。

小山田弥助、清田繩手にて勝頼の甲を見付け、名高御甲を捨ては如何とて、取て戻り、猿橋にて追付く。

(※品第五十二。下巻330～333頁)

(場面9 武田氏滅亡①)

天正十^{ホウキ}五年三月十一日、田野奥、天目山の郷民等、蜂起して勝頼を攻む。信忠の臣、瀧川左近将監一益、川尻肥後守、五千余騎を率^{ソツ}して、勝頼の居所^{フカク}を探求て、田野に攻入て、是を圉^{カコム}。

勝頼父子に及び、土屋惣蔵を始め、僅^{ハツカ}に四十^{フセギ}拾余人、是を拒て苦戦すると云へとも、多勢^{キソイ}競ひ攻撃の間、勝頼^{セメウツ}于時三十七才、信勝^{コハム}于時十六才、屢^{シバへ}戦て遂^{ツイ}に死す。土屋惣蔵奮^{フルツ}て戦て死す。其余、阿部加賀守、温井常陸介、金丸助



場面9

六、秋山民部少輔、小宮山内膳、原下野守、多田久蔵、僧麟岳等、皆討死。

(※品第五十七。下巻437、440～441頁)

(場面10 武田氏滅亡②、小宮山内膳赦免)

小宮山内膳は武田譜代の侍、大剛のものにて、常に出頭人と不和のうへに、小山田彦三郎と口論に付て、彦三郎は出頭人(と)中よきゆへ、何事なく勘気を蒙りけるか、天正十年(三)月十日の朝、彼の内膳、田野の本陣へ参り、案内をこひ、土屋惣蔵に逢、泪をなかし申けるは、三代相伝の御主、御目かねを当て可申哉、^{トテ}逆も御用に立間敷と思召、御勘気を蒙りし我等、御最期の御供いたしたらは、是、御目かねをはづしたるににたり。武士の道を立んとすれば的前^{カンルイ}の理に背き、理を立んとすれば儀に背き、臆病の名を後代に残さむ。御目かねをはづすとも不儀の名は穢されまし、御供仕るへし。御勘気御免の義を、土屋との計ひ給へと云。土屋惣蔵、秋山紀伊守、各感涙を流し、勝頼へ其旨申直す。

扨某か相手彦三郎と和談致さんと云は、彦三郎(は)十日以前、諏訪にて立退き候と云。

^(それがし)某、不和成出頭衆(三)人はと問は、昨日兩人、鶴瀬にてにけ候。壺人は五日以前、小松郷にてにけ候と答。

内膳、肝^{ツブ}を潰し泪を流し、さてへ御運の



場面10



場面11

すへかな、日頃御前よかりし程の奴原、忤人として腰ぬけさるはなしと、齒嚙をなすぞ理りなり。同十一日、勝頼最期の供して、田野郷天目山にて討死。

(＊品第五十七。下巻438頁)

(場面11 武田氏滅亡③)

同日、勝頼御室、娘人、并御最期の御供仕べしと申きつたる女房とも廿三人、ともに、

小原丹後守、同弟下総、金丸助六郎、同明何阿弥、供して天目山奥の小屋へ落給ふ。扨、信長方旗先みゆると有時、丹後、下総、助六郎、女房達を介錯して切腹す。

(＊品第五十七。下巻439頁)

(付記) 翻刻を御許可下さいました鳳来寺、閲覧の便宜を計らい下さいました長篠城址史跡保存館に深く感謝申し上げます。